

日本古義

二

和書門			
類	號	函	架
一七二九七	二二九七	三八七	五

內閣文庫			
和書	類	號	冊
一七二九七	二二九七	三八七	五
函	架	冊	架
五	一	五	五

內閣文庫	
番號	和 17297
冊數	5 (2)
函號	154 230



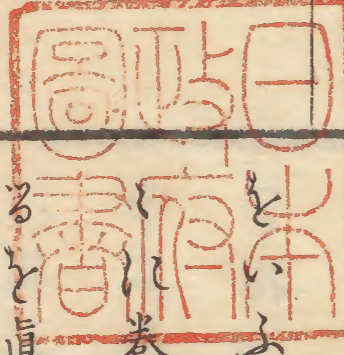
花廼家文庫

淺草之庫

日本古義卷之二

紀伊 高木尚三郎大伴正朝 述

義
真卷弓の古



真卷^{マキ}の弓といふと丸木の弓^{カバ}を繁^{シゲ}く巻^マくは

ふちり太古此弓ハ蝦夷の弓如く樺を所

巻一なり^{カバ}或は折裂む防ご^マふ樺と繁^{シゲ}く巻^マくは

る^マと真卷の弓といふなり上古樺^マ或は真樺^{マカバ}とい

へ^マ又樺を巻く詞^マも真樺と巻くといへ^マ樺を

畧語^マも^マ真卷といふなり後^マも真樺^マなり^マ藤^マを強

く^マなり故^マも角^マ乃^マ弓^マ此^マ角^マ乃^マ弓^マに竹^マを^マ合^マせ^マたり^マなり^マ爾^マ藤^マと繁^マく

繁藤の弓に
古義

巻く用ひきり是を繁藤シゲドウみ弓といへど但し軍陣
の弓ふら割藤を巻べし割藤ハ割きぬきしふら
皮付多しといふやう様サマ悪し然れども其用強し
挽藤も其用弱をれども其様をぬ故ふ的弓に用
ゆふらり挽藤ハ細く割る其角を落し挽多し
了切 正朝 國々巡行メグリ見聞と所今の世尔上
古若弓矢に遺ある者ハ甚稀なり越前國四ヶ谷
廣野村にいふ所乃的場といへば農家より者
と上古に真卷の弓なるを聞か
時天保三年
壬午九月十

果古義二一

麻卷の弓の
名義

新木白木塗
木とよ古
義

二 彼地より到りて是を觀る木竹合せ多し麻卷
麻マ多し卷詰マキに塗木にして上古に物ふらりば
新木白木塗木おどいへば上古
水乃弓を用ひし詞に遺る也日向國高千穂
能民家ふら見しその土佐路に山中より農民
造る此等上古に丸木弓の製れ遺るは
了梓を以て造り長三尺七八寸より長き者も五
尺乃至より其外吾國古代に物も邊鄙に遺り
ありて其古製に知られし事以紫蝦夷にて用也
る弓矢ハ吾國太古に遺製なるをば或朝鮮の

弓ハ吾 國角形弓乃遺製なる類あり上古の詞
亦弓城月にもやへあり是を丸木弓をいひしか
直那る物と曲を付形と半月の如くあり是を
引満形とれと満月の形亦なるあり亦丸木弓
ハ短ふ故^{ナリ}勢を附^{ナリ}直か亦故^{ナリ}引満をば圓く
あるをいひしなり後乃世に至り次第に長く形
を^{ナリ}付故^{ナリ}上下^{ナリ}勢を附^{ナリ}多^{ナリ}なり此勢を附^{ナリ}
亦弓亦^{ナリ}ハ張き^{ナリ}形半月^{ナリ}は亦^{ナリ}引満^{ナリ}と
も満月乃形亦^{ナリ}ありぬなり此長^{ナリ}弓亦^{ナリ}上下

早宮義三二

亦勢を附^{ナリ}直^{ナリ}上弦底弦^{ナリ}引力^{ナリ}を^{ナリ}故^{ナリ}あり是
も長^{ナリ}弓を短^{ナリ}弓^{ナリ}此力^{ナリ}も同曲^{ナリ}を^{ナリ}の考^{ナリ}あり
今乃世に古代^{ナリ}物^{ナリ}と^{ナリ}神社佛閣^{ナリ}に納^{ナリ}免^{ナリ}所^{ナリ}古
弓^{ナリ}長^{ナリ}と^{ナリ}城^{ナリ}と^{ナリ}上古^{ナリ}此^{ナリ}弓^{ナリ}の長^{ナリ}と^{ナリ}證^{ナリ}と思^{ナリ}ふべ^{ナリ}か
ら^{ナリ}此^{ナリ}等^{ナリ}弓^{ナリ}ハ用^{ナリ}ひ^{ナリ}物^{ナリ}は^{ナリ}あ^{ナリ}る^{ナリ}に^{ナリ}多^{ナリ}く^{ナリ}崇^{ナリ}奉^{ナリ}
納^{ナリ}乃^{ナリ}弓^{ナリ}形^{ナリ}を^{ナリ}大^{ナリ}く^{ナリ}見^{ナリ}事^{ナリ}ある^{ナリ}處^{ナリ}に^{ナリ}造^{ナリ}り^{ナリ}
納^{ナリ}め^{ナリ}を^{ナリ}付^{ナリ}弓^{ナリ}ども^{ナリ}あり^{ナリ}を^{ナリ}れ^{ナリ}を^{ナリ}あ^{ナリ}そ^{ナリ} 大神宮^{ナリ}へ^{ナリ}御
進^{ナリ}獻^{ナリ}の^{ナリ}御^{ナリ}弓^{ナリ}を^{ナリ}長^{ナリ}八^{ナリ}尺^{ナリ}を^{ナリ}う^{ナリ}ま^{ナリ}れ^{ナリ}を^{ナリ}檜^{ナリ}と^{ナリ}以^{ナリ}て^{ナリ}四
角^{ナリ}亦^{ナリ}削^{ナリ}り^{ナリ}れ^{ナリ}丹^{ナリ}塗^{ナリ}を^{ナリ}御^{ナリ}弓^{ナリ}形^{ナリ}今^{ナリ}此^{ナリ}世^{ナリ}に^{ナリ}神社^{ナリ}へ

奉納の弓矢太刀繪馬あど大ふき多見事にうご
て納むるを以て想ひ合をべし又丸木弓の製を
今の世若弓の如く大なる木城よりて丸く削り
て物ふをゆへに頃とれ枝を切とて自然の
丸木村あ家所を刮削して弓に造りあり故
に丸木乃弓とはいひしやう後世も至りて弓
長く作り多故小大なる木をわり多造るを
て丸木弓と大ある木城より削り多る弓ふと
折るゆをて用ひがた故に自然に丸木城用ひ

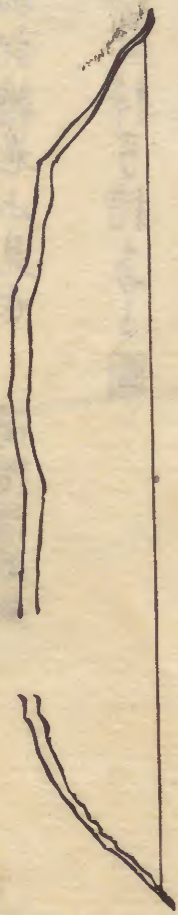
しやう夫木抄

今日見を弓をゆわとふ作りは草とて
岡邊の槻乃片枝とてあり

鳥羽僧正の繪に見ゆ

此繪梅尾あり

梓弓之圖



春日權驗記繪卷小見也 高階隆兼画

御隨身梓弓持るる圖

自然此丸木をて造ア
弓乃形あましく正
古画ふくも知るべ



日本古義一四

勝繪卷小見也 鳥羽僧正画

梓弓と木丸弓と交へ持るる圖

此圖と上古相撲と
行司とる式を勝繪
此勝負と行司とる
圖體ふ画れしもの
なり

梓丸木





今此世歩射乃式
 用ゆる數塚ハ上古
 少々如此み矢と指
 一なるなり

梓丸木



日本古義二五

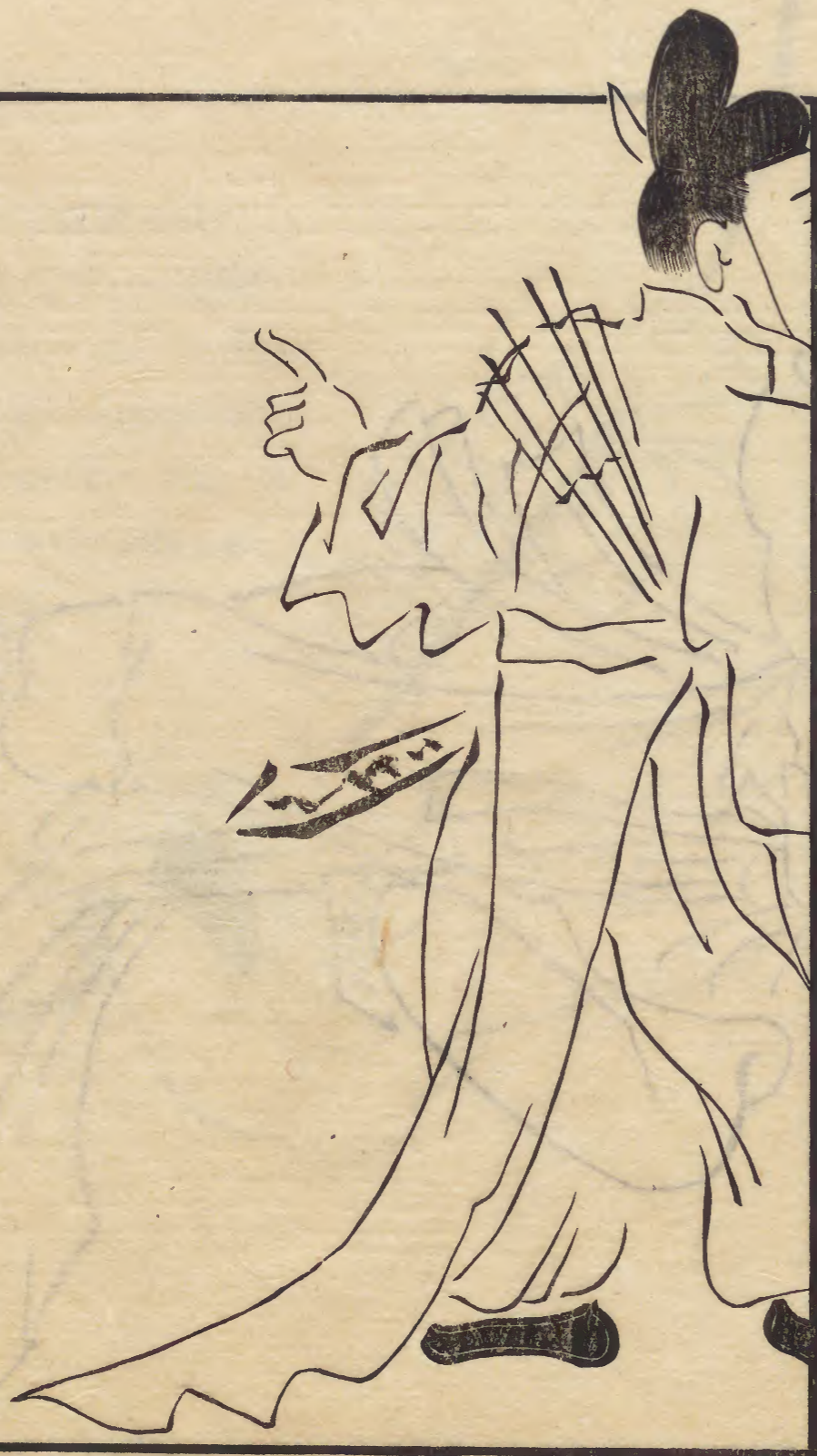


梓丸木



木弓弓

日本古義二ノ六



上古より丸木弓と木竹弓と
 交へ用ひし事此等の古画
 ても知るべし但し木竹弓と
 して今世の木竹合せと
 り此形より太なる木竹と
 削りし弓より東大寺木竹御
 弓は圖より観るべし

木竹弓

日本古義二七七

土佐基光相撲繪ふ見也

相撲行司と其圖

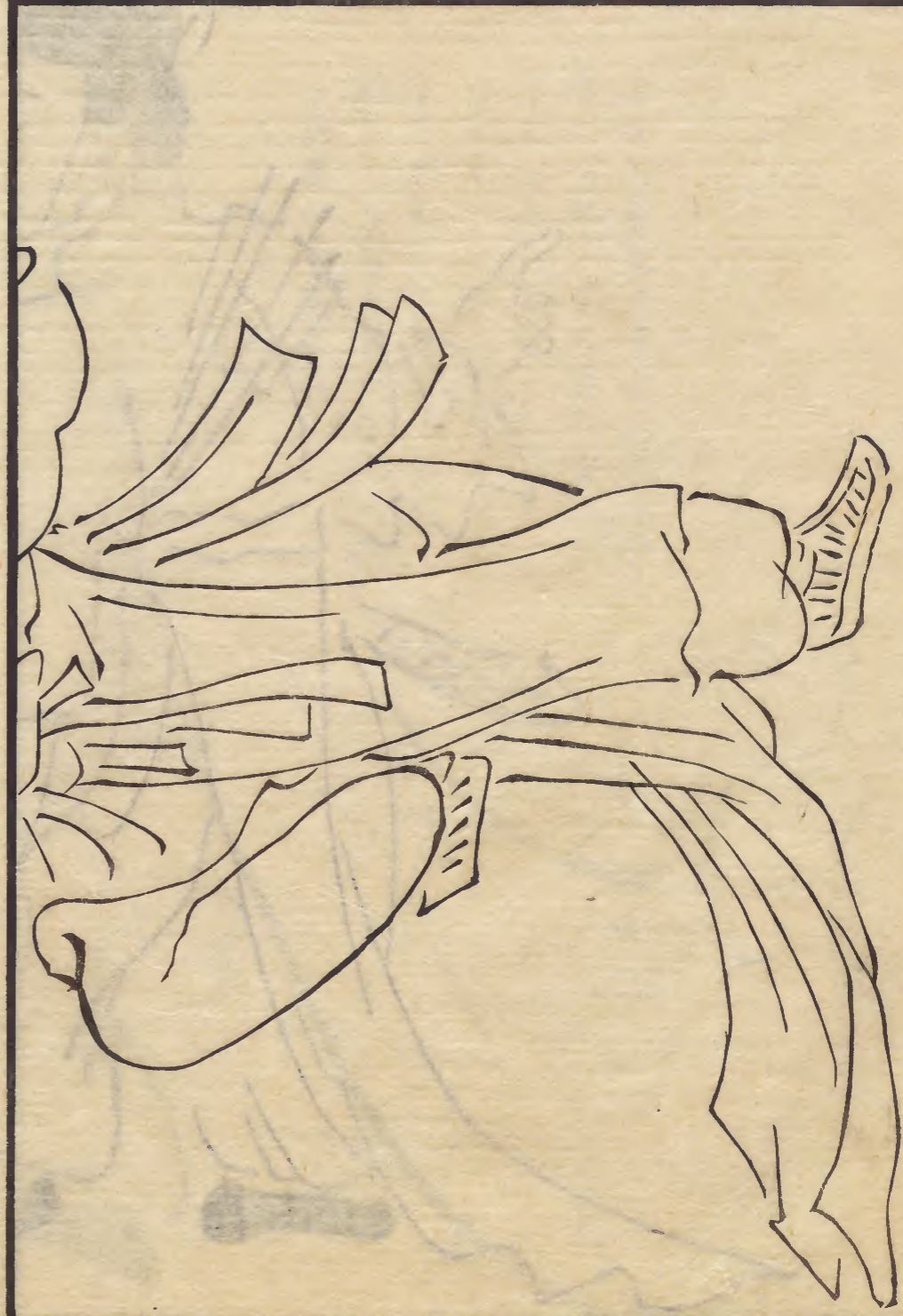
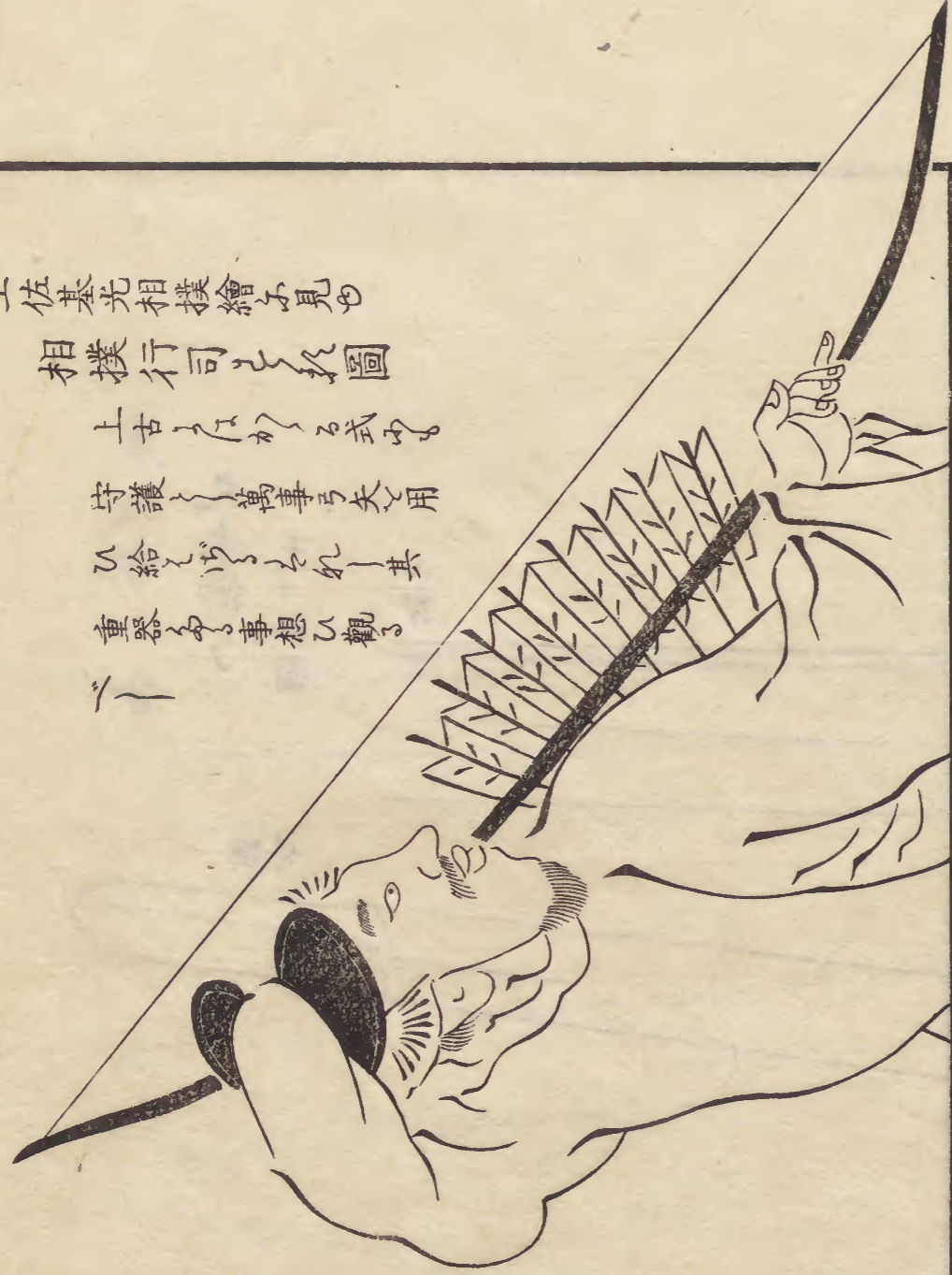
上古よりかくる武也

守護し萬事弓矢之用

ひ給ふはこれ其

重器なる事想ひ觀る

了



日本古義二八

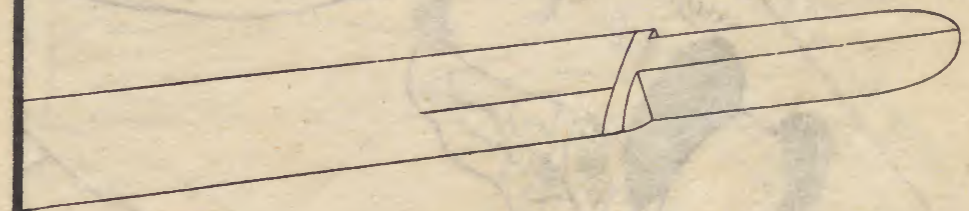
東大寺 倉

丸木御弓

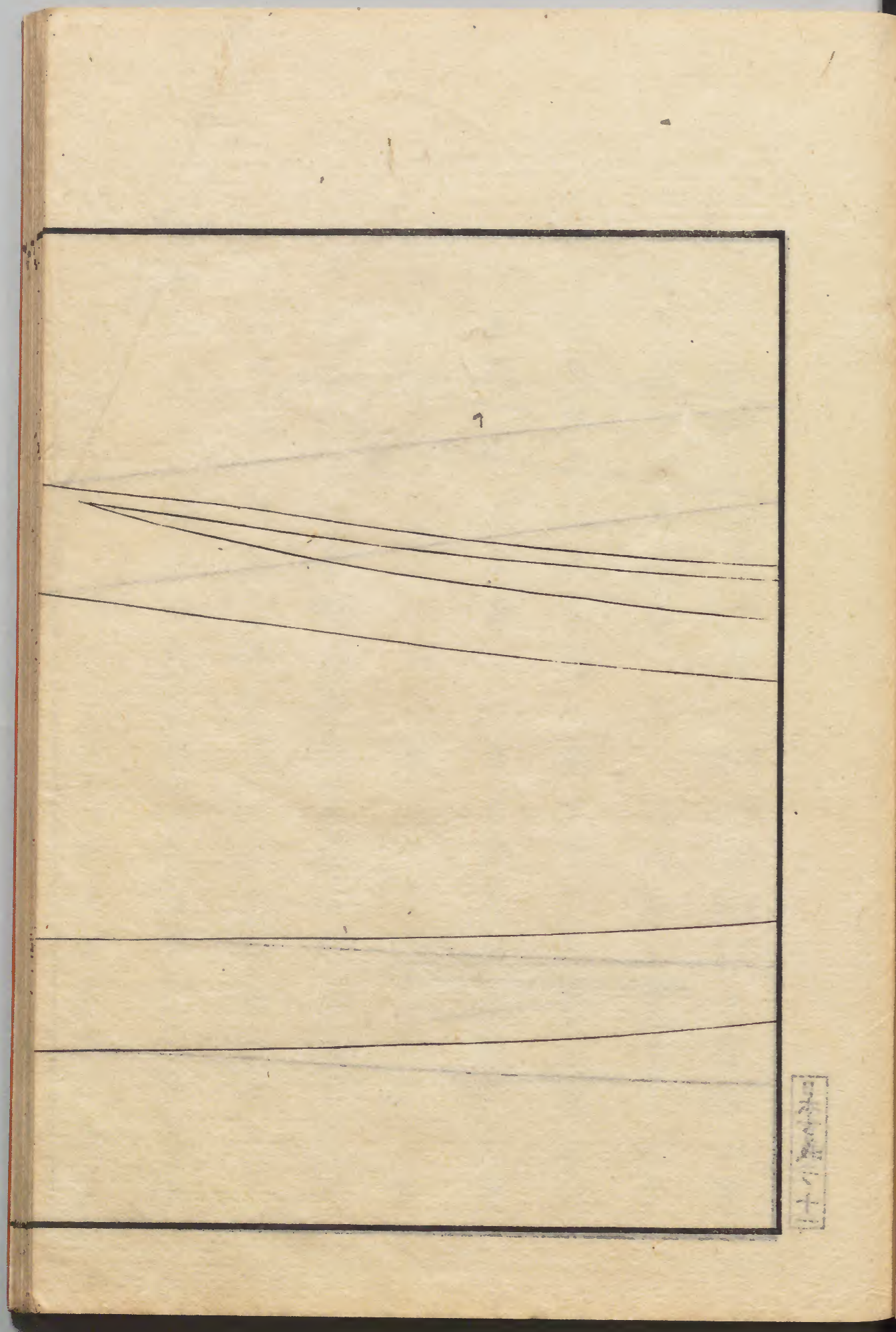
大サ如圖

△合印

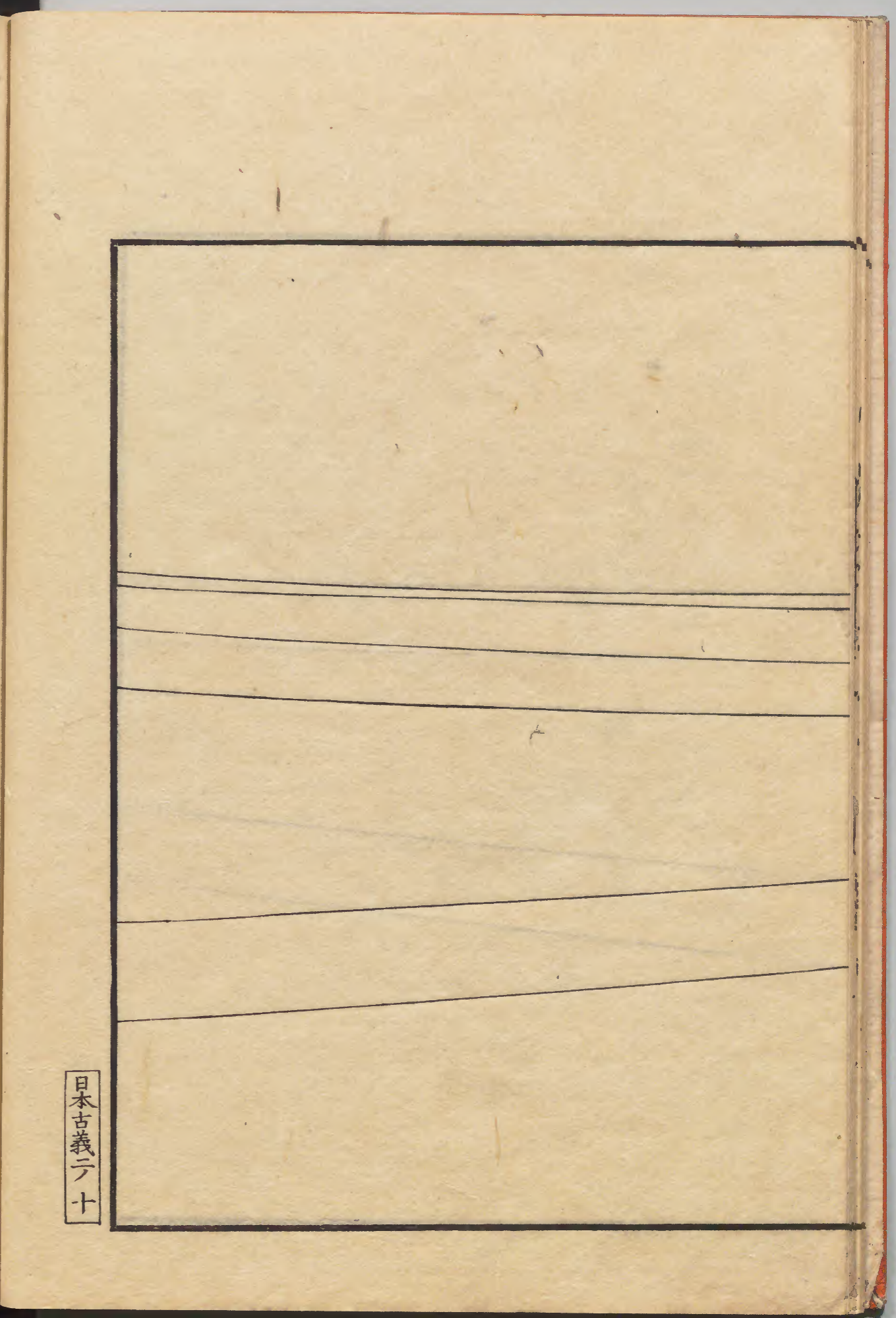
木 彙



日本古義ノ九

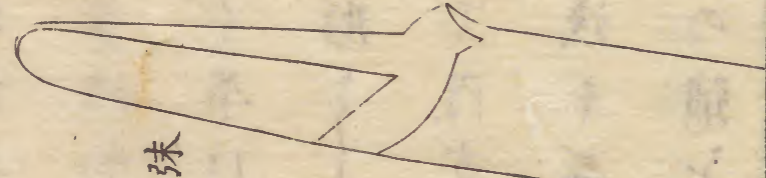


日本古義三十二

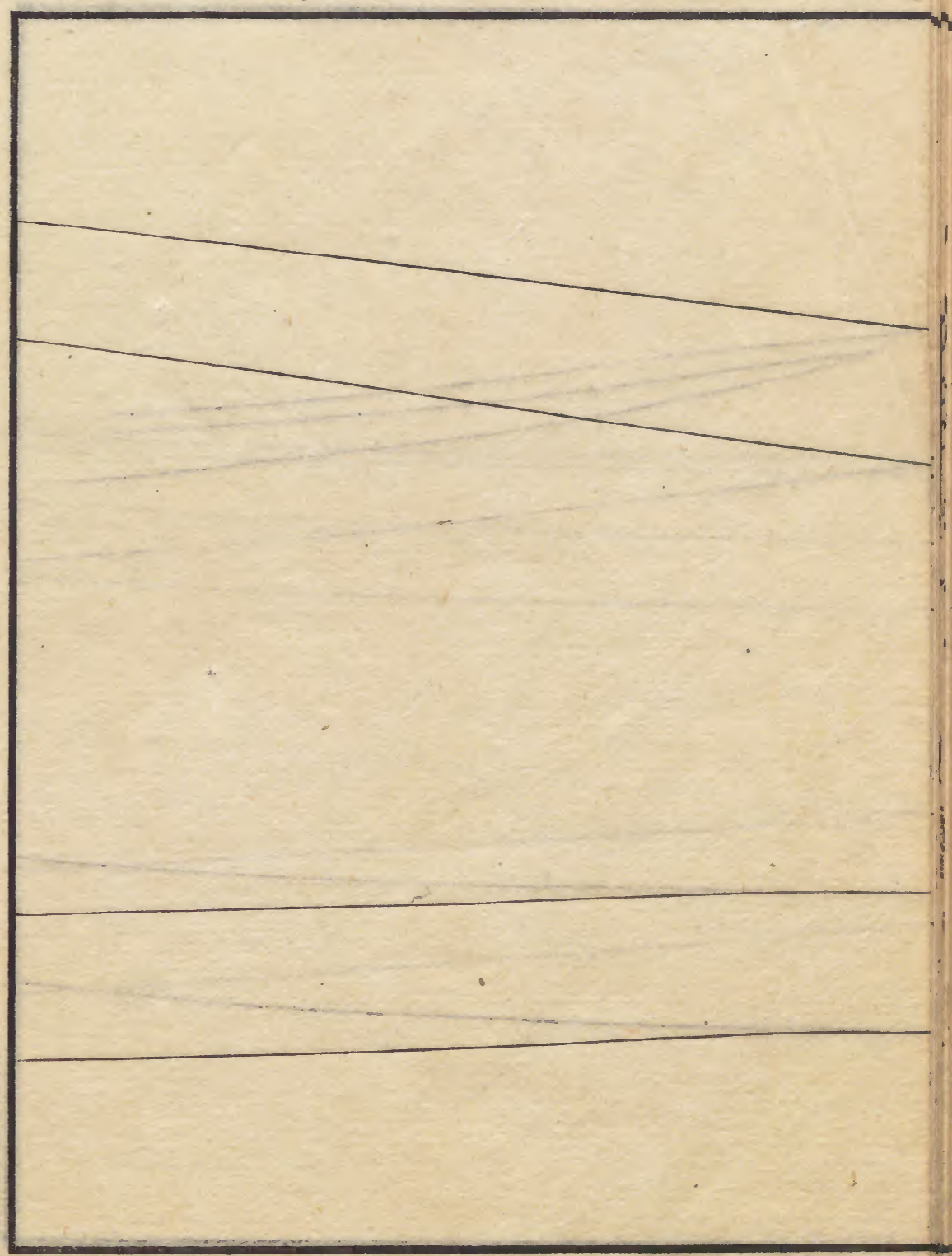


日本古義三十

Faint vertical text columns within a rectangular border on the left page.



珠

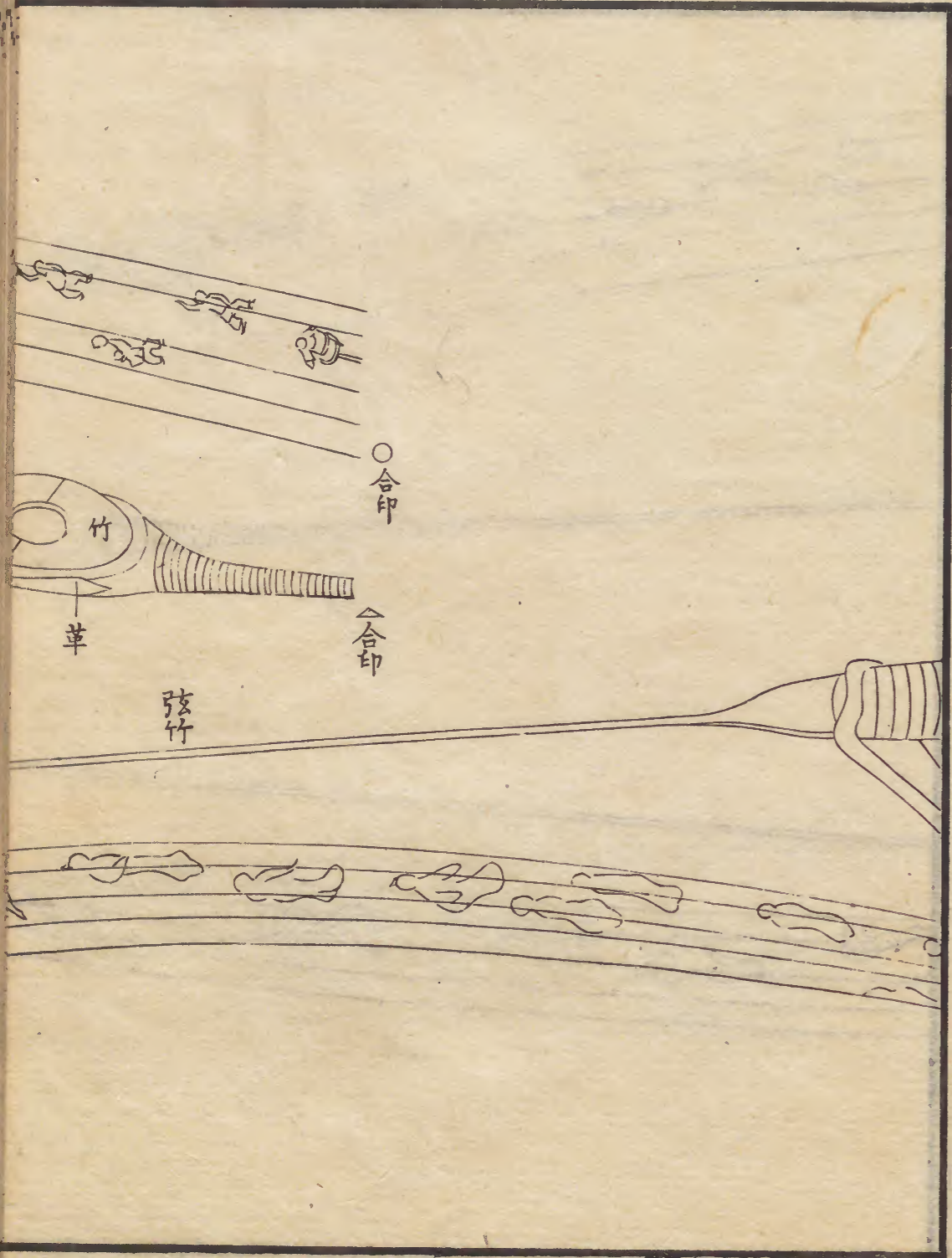


日本古義二一十二

今此世ふらる 御所乃木若御弓を長六尺總金
 梨地ふまゝ唐草此蒔繪あり今の木竹合せふら
 弓乃六分五釐計、若新木を削りたる程み太ふ
 て御弓此形を總體飯櫃形ふまゝ外方丸く内方
 ハ少く平にして二筋に樋以凸ナカ内方少ハ三角
 かる形より本末乃方多自然に細く削り弓束
 を除て内方上下大勢に邊まで刀に樋を彫るは
 如く浅く二筋刮通し又一筋刮通し多るも弓
 上下の彌を銀ふく包む
切詰乃邊と
殊先より弓束よりハ錦

日本古義三十三

と巻 二色ハ紫をいふなり是
陰陽以合せ多れ色なり 弓束に上下ふ二分
 計、銀を巻弓束乃上り一所同下より一所幅五
 分計、長七寸計、桃色の紙を重祓うゝ巻弓束に
 上大勢此下又手下ふ柄糸乃如くに打多れ紫の
 組を巻く架但樋以刮通し多るを居より上
 下引きゆるやこれ多免那を丸木も木乃御弓を
 りれ塗木なり白木のゆふハ雨濕り逢へど
 重くまふやふは是を炎天より何れは乾りれ
 反ゆがむ故ふ塗木にまはる

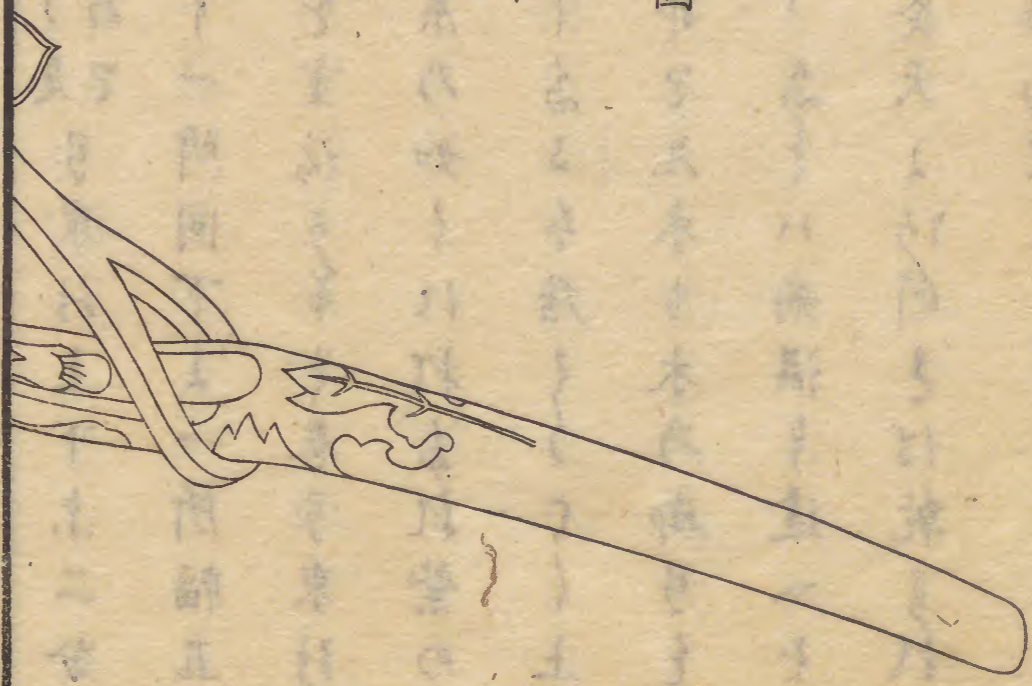


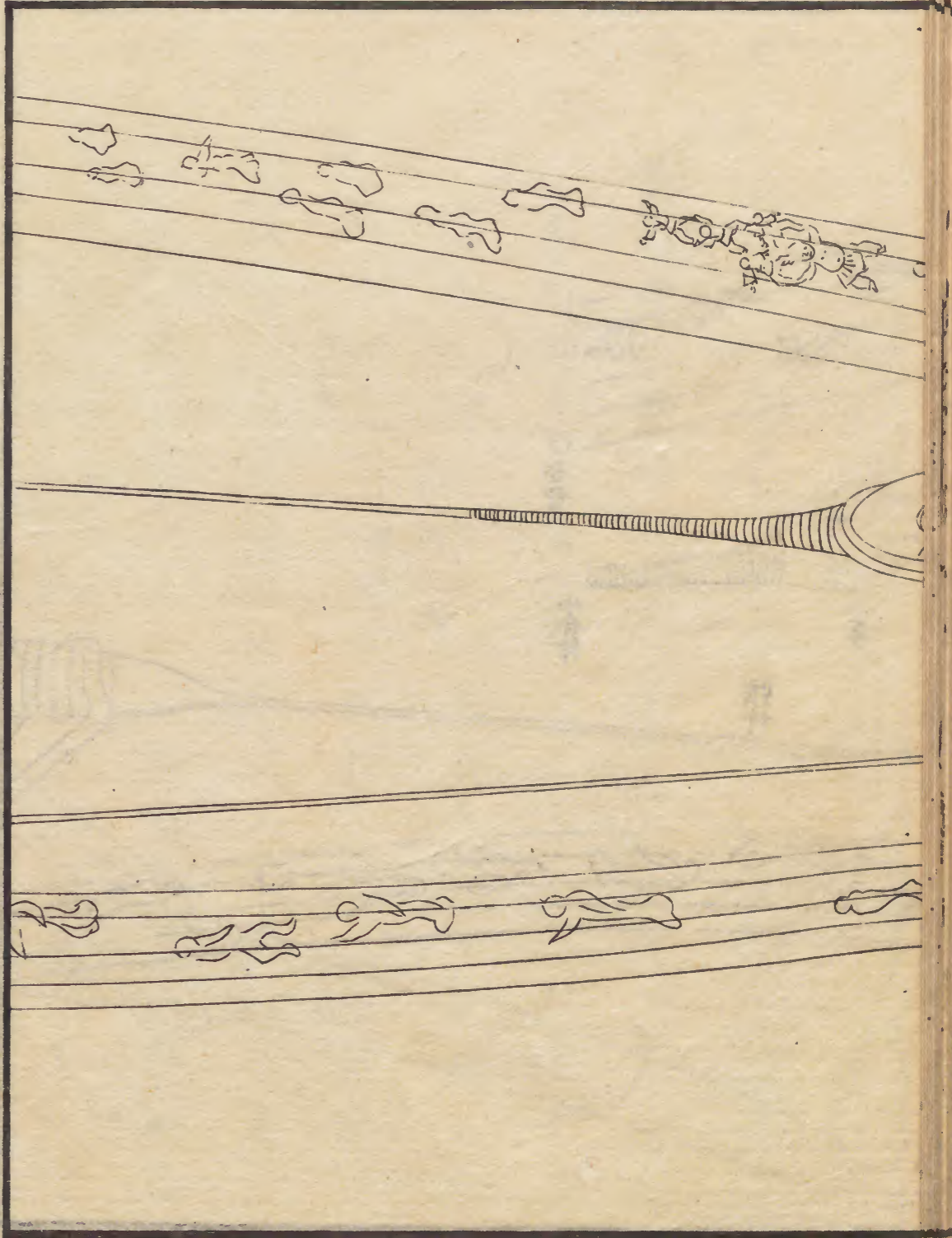
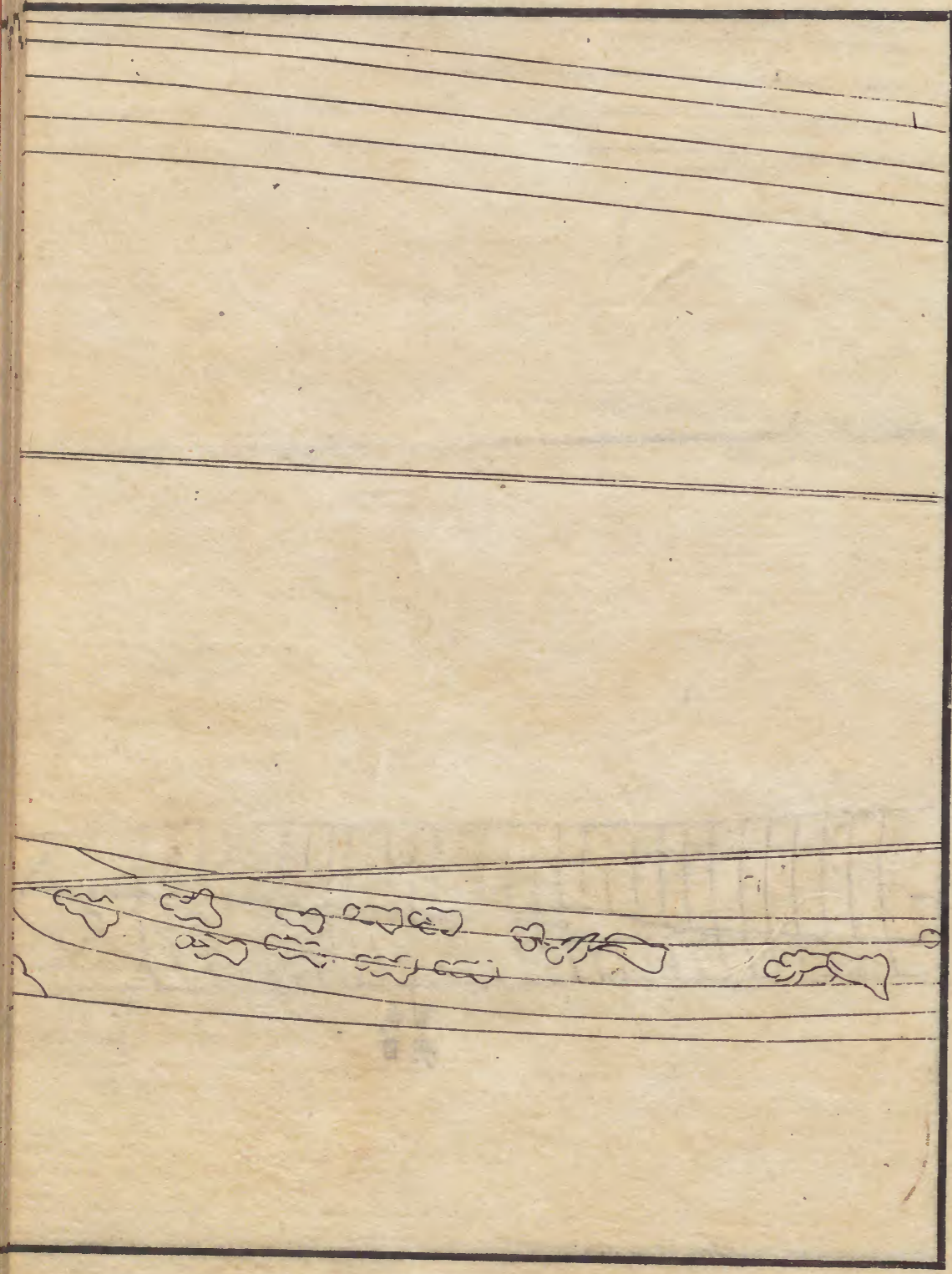
東大寺 倉

木之御弓 大如圖

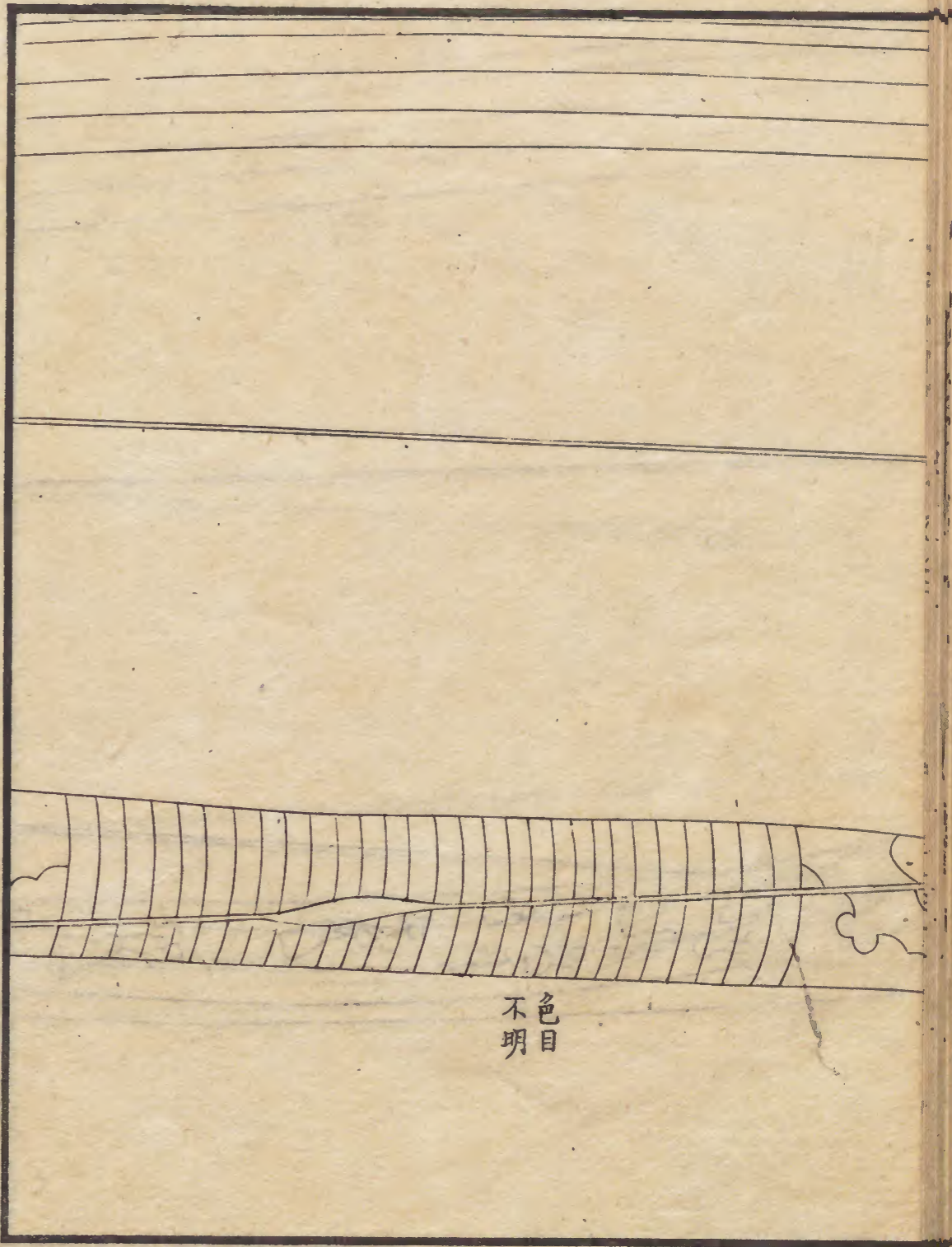
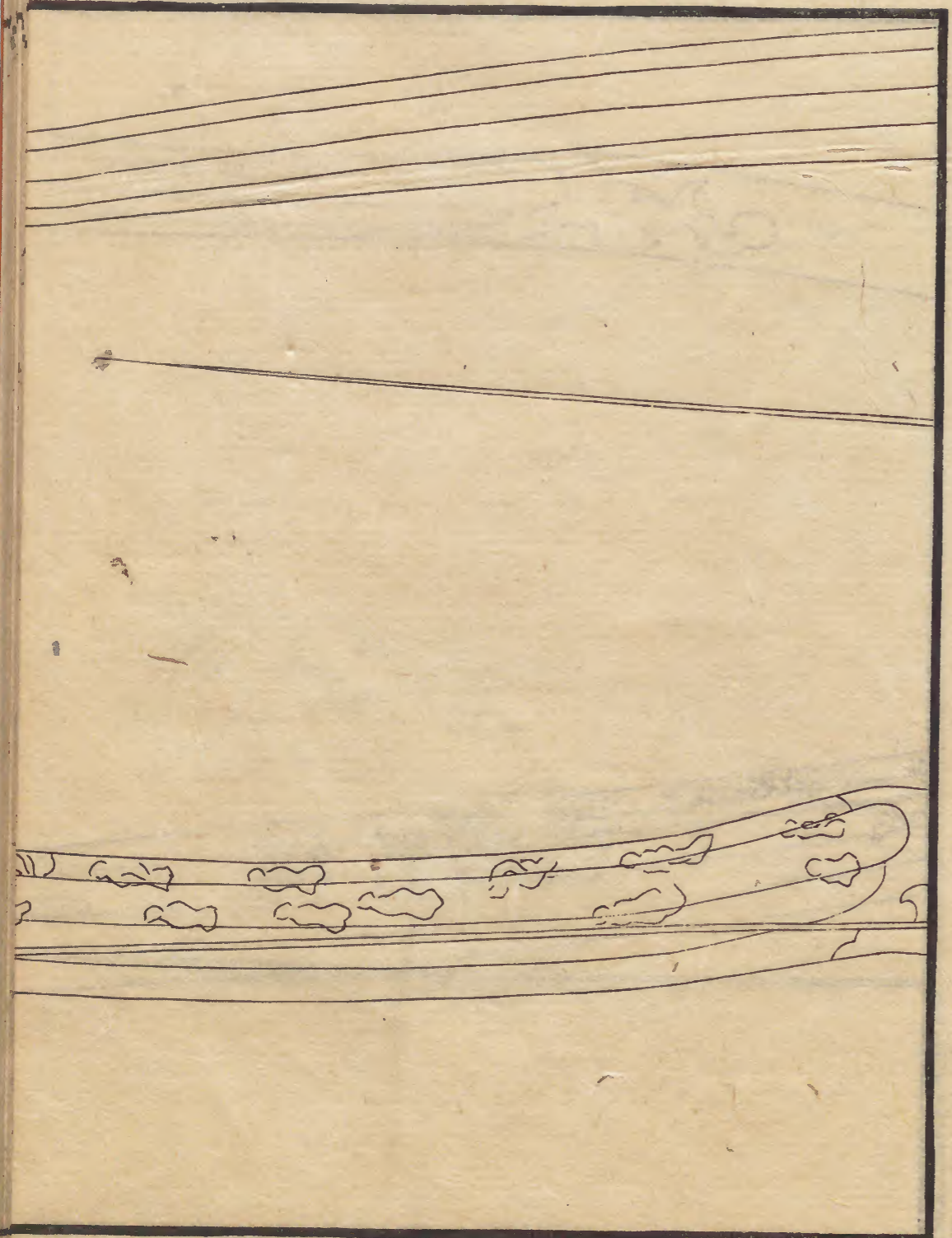
御弓外丸く内三角
内一むく摸搦人
物密

日本古義二十三



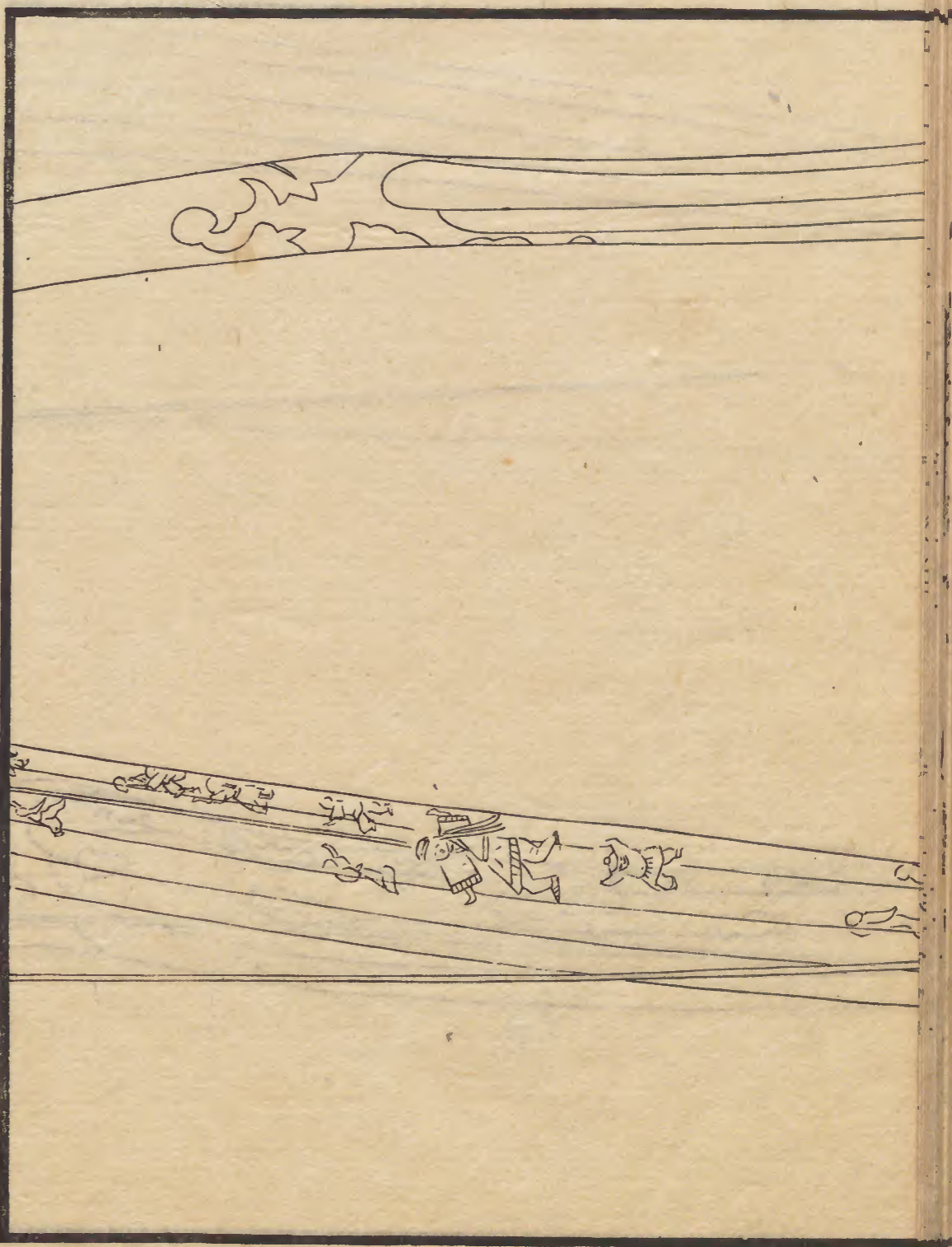
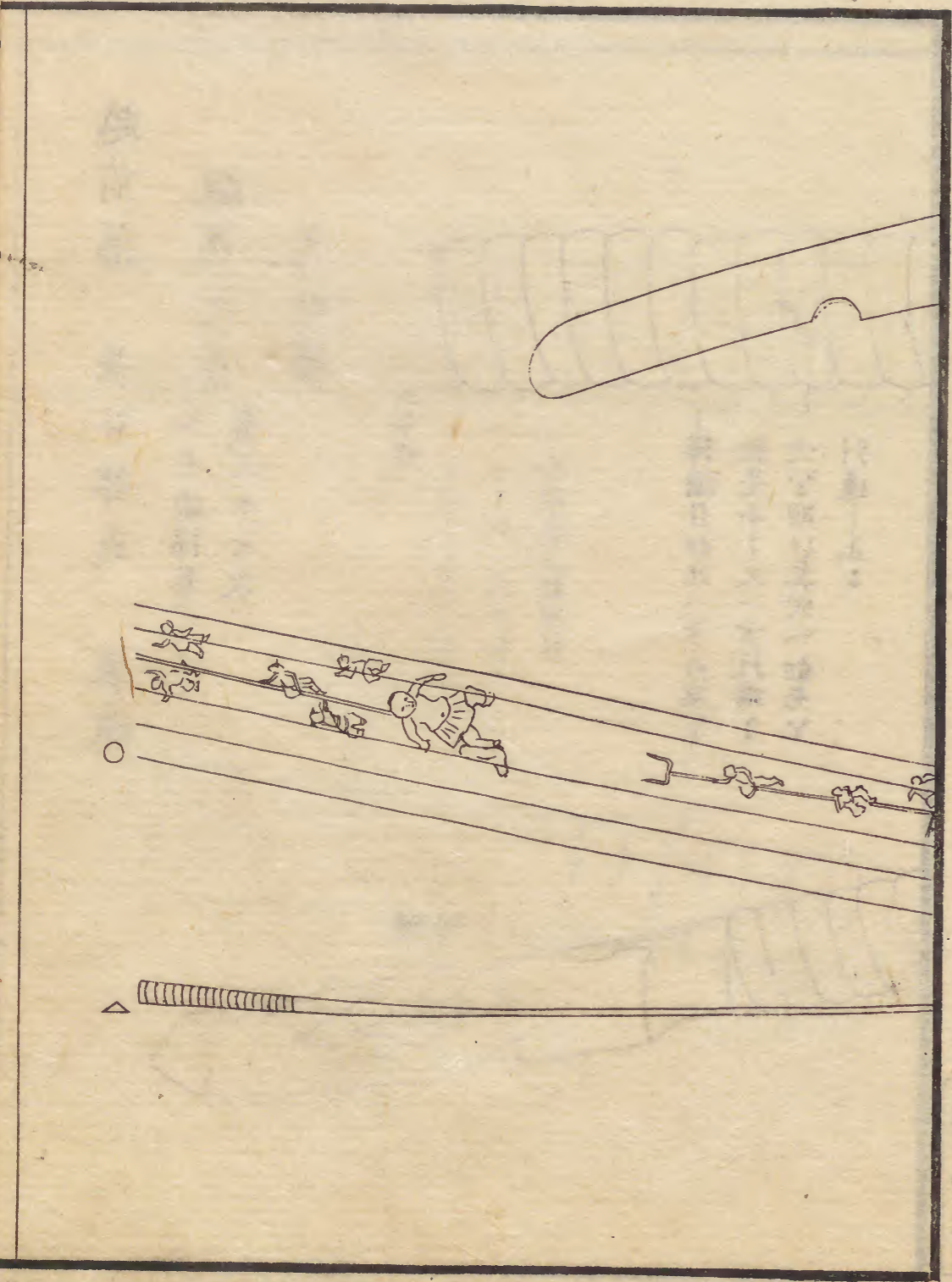


日本古義二十四



色目不明

日本古義三十五

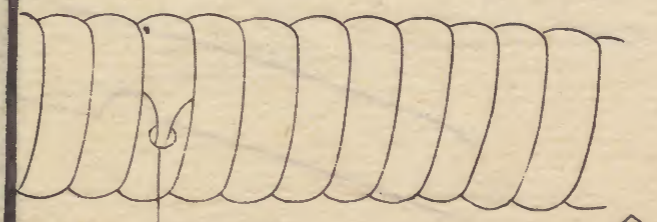


日本古義二十六

越前藩 長谷部氏 家藏

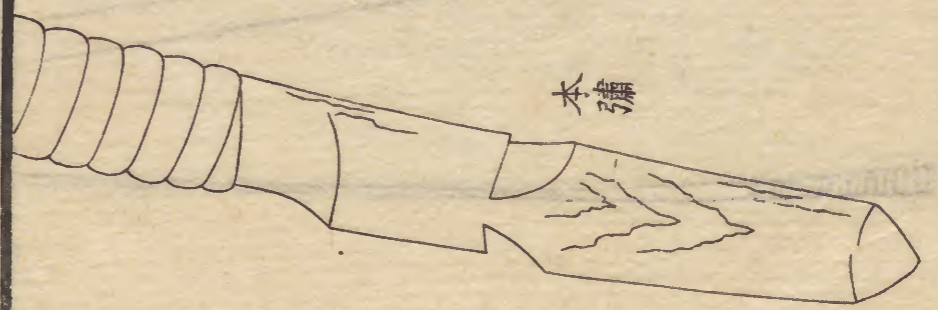
蝦夷之弓 丸木總樺卷 重_ナ五十七匁

大_ナ如圖



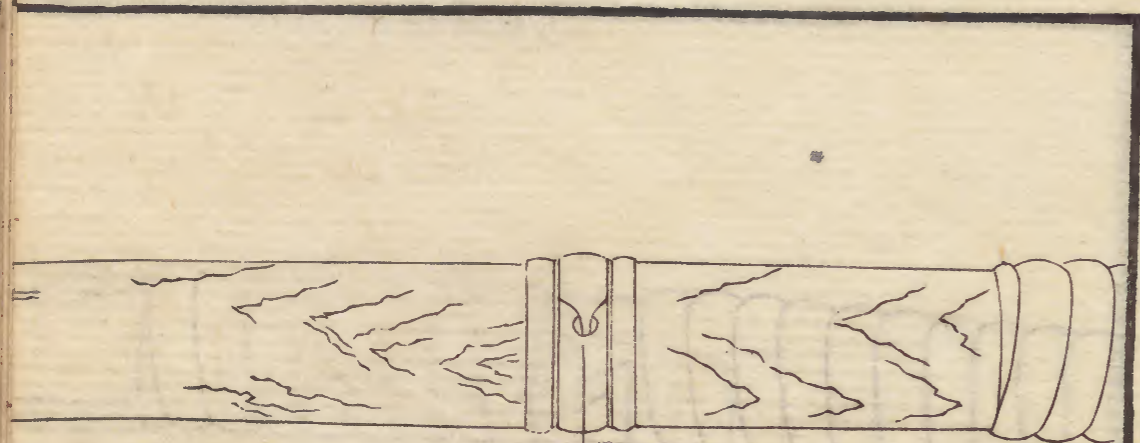
△合印

樺繼目如此一方の端を
劔先_ホ一又一方此端_ニ
穴と明け其穴へ劔先と
引通し止る

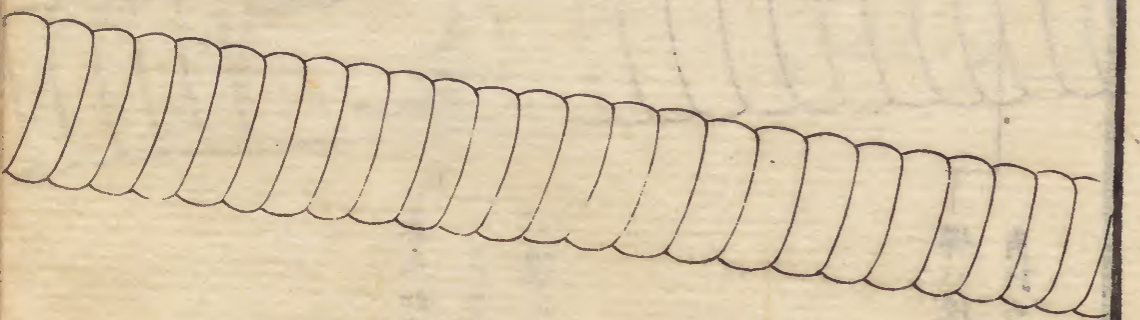


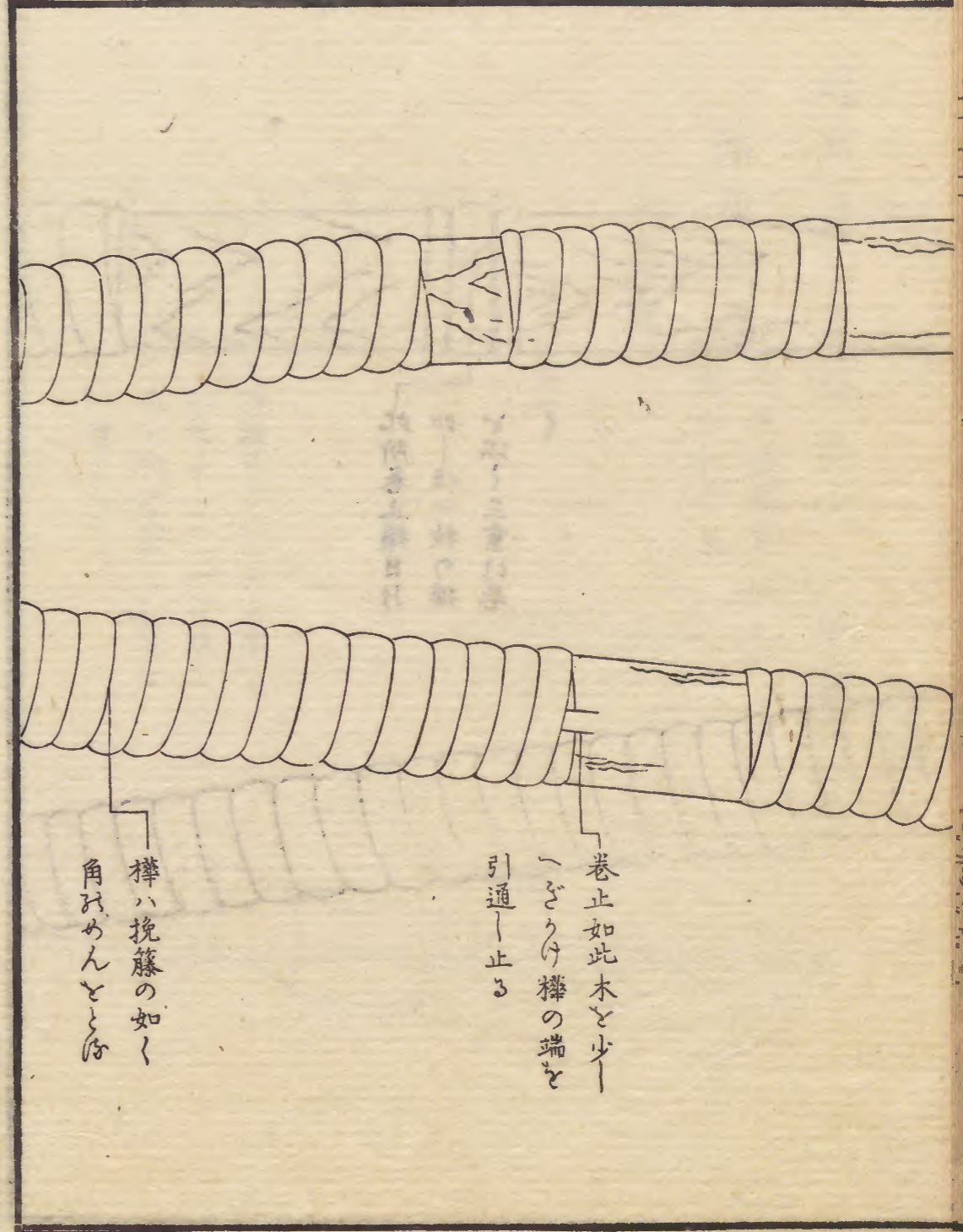
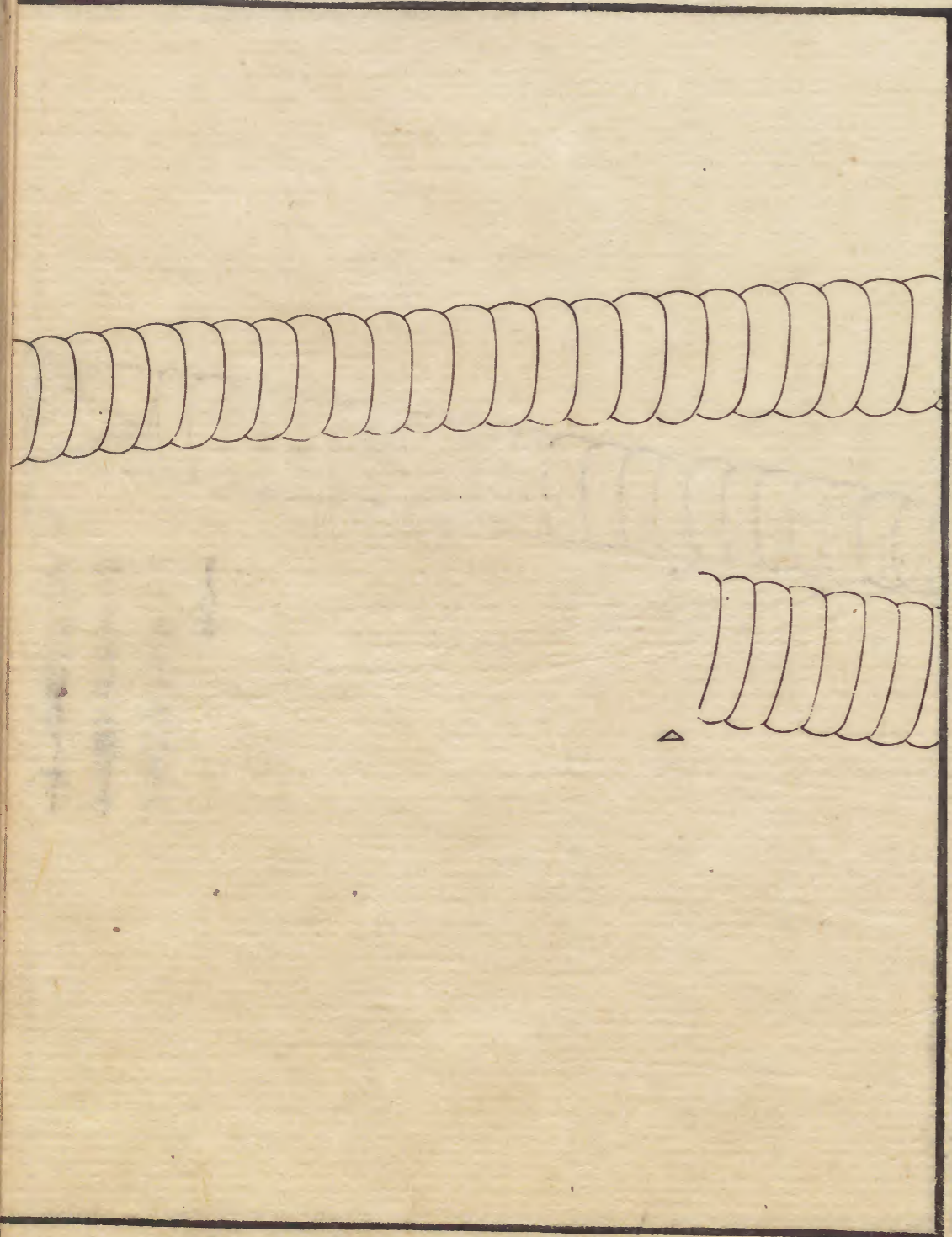
本_ナ彌

日本古義二ノ十七



此所卷止繼目_ナ
如_レ但一枚の樺
と以_テ三重に卷





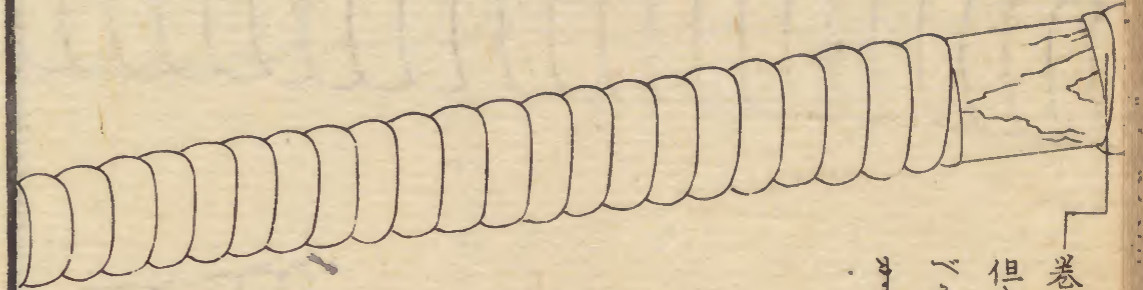
卷止如此木と少
一どくけ樺の端を
引通し止る

樺ハ挽藤の如く
角折めんとして

日本古義三十八



殊



卷初如此藤卷く如
 但一巻初巻止繼目と
 べく側木乃外れ方へ
 まるる

今此世亦用ゆ糸弓ハ角の弓此變製なり角の弓
といふと木若弓此事なり此木の弓に竹を合せ
るあり丸木弓と自然乃丸木ふく其は造
し弓をいふなり丸木弓と太古此製あり上古
と木の弓と竹を合せしは弓と交へ用ひしなり
後の世亦至り武射盛みありて矢束引く事
を主せしなり弓長くなり彌を木にし其製
作或かへるなり其古製此遺りなり今此半
弓なり夫木抄なり

梓弓と糸弓と通に姉竹のふくまがふくも
らざれ申う同抄よ

はるる能ぬあふ交りなりあつみら
多づるふむく人をねし又同抄よ

みらもかるまれば流の真弓をかし思ふと
る君尔と案る能あど木竹合せを能り古歌
ふも多くとみ合せり今此世よ

木竹合せるは御弓と長六尺總黒塗にまき金粉
ふも唐艸の時繪り其間こ小窠乃内り唐花桐

乃紋を付あり上下に彌を鍮石ふく包こ弓束の
 上下に八分むりてげ鍮石を巻こ桃色紙を
 巻こ節巻乃如く所々成巻せり古の樺
 卷を紙ふかへあるなり
此御弓を四品以上の人
 の持弓なり御隨身乃持
 弓ハ黒塗ル一丸木御弓も木能御弓を皆塗木よ
 て時繪せし一丸木御弓を皆塗木よ
 なる白木乃御弓を見え次
 鯨を海魚ふして其形鯨に似る丸をとり大^ナ一尺
 七八寸より三尺餘あるもあて此魚日向邊よ最
 多く正朝延岡ふりり一時志をくふは成喰へり

味甚美あるを此魚は此鯨乃腹を割バ脊骨を油
 能強き袋附とあり其袋を割て表裏の血成よ
 くふをとりて其^{カゲボシ}陰乾ふを置き用ゆる
 とれを膠此如く細うく煮湯煎に用ゆるか
 鹿乃膠をとりてよく附きて至り堅なるのなり
 古代ふを皆此鯨を用ひりありあを此鯨鹿の
 角乃巡^{メグリ}れ皮肉を膠に練り少く交へてを
 放るるをいふとれ一古代此鯨を付て木竹合
 とふとと藤かづつを巻多故小新木を藤

雁ツカ音ツカ弓ツカ古義

故といふなり

紀伊國山口、莊雄山といふ所、尔木村といふ弓
工あり。木村と稱す。此木村が家を
古乃關守が子孫あり。今の世、尔至て相續り代
り弓工成るる家業とせり。されが造るれ弓に白
鳥關の銘あり。又カリガ子弓は名世に高く其製作吾
國第一あり。あつる白鳥關の古跡。して白鳥明神
社あり。祭る神、即白鳥と化し。きり關守が手束
弓あり。と我手束弓とは明暮身を放さば。して手

日本古義二三三

尔ツカ束ツカ持て愛し。り家弓をツカ手束弓はツカいふ
と。木村が家も傳へいふ。そし男あり。とり女
を思ひ。深くあはて愛し。けり。やぶる夢、尔あり。乃
とんお。我は。も。所へ行かん。や。か
み。ば。止む。我か。り。に。哀。尔。と。べ。を。あ。り。や。い
い。も。れ。ほ。ど。尔。夢。あ。る。驚。さ。る。れ。女。を。あ。く。
多。枕。上。よ。弓。を。と。り。淺。き。し。思。へ。ど。を。い。う。せ
む。と。弓。成。旁。尔。立。り。明。暮。手。に。と。ぬ。ぐ。ひ。か。ど
あ。り。身。を。と。れ。つ。あ。を。ぬ。り。月。日。ぬ。る。ほ。ど。に。白。鳥

ふちりて遙乃南は方雲ははきて飛行るぬ尋ね
る見まば紀國は雄山^オに到りて多うせぬ女をか乃
山は關守の弓少て我はゆりぬれといひ傳へり
あも藻鹽草に見えふはとれるも説なり此木村
が作る弓に^{カサキ}は銘あるも此白鳥乃縁りて我
らのぬむかし夫木抄も
わりの後糸手束は弓の白鳥を紀の川ゆり
らひぬ日どぬを同抄も
紀の國はむう弓雄の手^{モタルナル}持在響矢ありは

日本書紀三十三

事 弓矢相應の

やこがおもふら名寄る
あさとき紀の關守が手束弓ゆるは時
待經ゆ家君同集ふ
關守が弓はを法てし概は木の法をきぬ戀
我はとゆへぬ萬葉集に
吾脊子^{ワガセコガ}之跡履求追去者木乃關守矢伊將雷鴨^{イトイメンカモ}
かど關守が手束弓は事古歌亦多くを
弓は寸尺も其人性亦應て用ゆるを
古代より寸尺も定りぬ其長^チを七尺五寸と定

めいハ鹿苑院殿乃代より其事より後尔木村伊
兵衛二寸切詰より七尺三寸とありぬ堂弓の長凡六尺九寸と定めハハ
竹林貞次が工夫也ハハ損失の事事故尔吉田雪荷其矢
束相應の弓長を考へる大矢束より小矢束に至
る其割を以て空尺決定せり凡曲尺は定め小
三尺乃矢束を弓長七尺四寸四分小寸なり
ふより矢束二尺八寸より矢束一寸は短
くおるに隨て弓は矛四分は短くおるなり矢

束二尺八寸より同四寸までを矛一寸は減む
れなり三尺内外乃矢束を大矢束といひ二尺九
寸より同三寸五分までは中矢束といふそれ
は一尺八寸より小矢束といふなり右の割ハ
大矢束より小矢束に至る弓は空尺乃規矩あり
大矢束を定法の割より矛長くして大矢束に
徳めを矢働をり割をどの矛を極むまを
弓痛むなり中矢束ハ定法の割あり撥をく矢
働をり規矩あり小矢束を定法は割より矛短

中指一
寸と折
るとい
ふ詞
引力を
試る
事
弓の張
るとい
ふ古義

くせざんをめぐみりり多ありとあり又戰場
 持以弓を此曲尺を用ひて吾中指を折る一寸短
 くをこれなりと吾高指の節と節是を六具試堅免て
 と常ふ同曲とるあり扱弓の引力を試るは張
 ハを畧してを五寸一分ふして附成桁などに釣
 る中關の四貫五百目此鍍とつけ見ると張乃外
 糸一寸九分引く力を一寸の力とすれり此底
 引力を十四貫百目乃鍍を同四寸六分引るは
 かけると二尺七寸引ケたり同二尺七寸引ケ也
 九分此力と次底力と十二貫七百五十目此同七

日本古義之三十五

事 村刮規矩の

寸三分引る力を八分此力とれ乃十一貫四百目
 糸同 同一尺引けるは七分の力也次 同十一貫五
 うきと右 同一尺二寸七分引る力を六分此力と
 糸同 八貫七百目此鍍 同一尺五寸四分引るは
 五分の力とれ 同七貫三百五十目乃右六段此割
 合と強弓より弱弓糸至る引力を知る弓は空尺
 りり上弦底弦乃引力兩様を分る用ゆるハ戰場
 二用ゆる弓は製とれ多先り用ゆるなり
 今乃世糸用ゆる弓は村刮ハ吉田雪荷が村刮と

とて規矩とハ弓を削る規矩ハ古と詞なり萬
葉集ヲ削河原之ヲ附ノ所竹幅九分彌ヲ肩幅八
分同所三頭厚と弓此分一分減比同弭長と一
寸二分同弭先厚と三頭厚と一分減と同先幅
三分同元幅五分同關板長と二寸七分彌肩幅九
分同三頭厚と弓此分同弭長と六寸同先
幅四分同元幅六分同彌先厚と三頭の厚と一分
分減比同關板長と二寸四分右の通り小曲尺と
求め削るなり此寸法と本源乃作法るれども

猶肉置等ハ弓尔應ト弓勢死活ヲ撥ニ入る所
を知ル多村刮様と射手乃工拙ニ多れベ堂弓
と鮫村をト木賊みケ
ふハ弓去ぶトなる意アリ

村刮弓ヲ建久年中ニ御的アリ一時小
笠原信濃守貞宗弓太郎ト古ニ弓ヲみタとシて
色ハ多クれ少一張ニ勢アリを所ニあリを改
めテ用ヒらレありキ終ニ面白クとシてわカ
と弓を赤クとシてシて塗リて小刀數ヲ
定メて所ニ刮キげテ我家の祕事ニ用ヒ

らるゝなり其例を志して御的乃時弓太郎と
いひも村刮弓試用いら終り故尔自餘乃射
手を憚りて是も試用ゆ事か鹿苑院殿此弓
を浅くは寵愛なり御自身の射らゆ時を
いひも此弓を用ひらるなりゆ事といふは常人
を憚りて是を用ひて御免ある人と格別なり
ふの故り村刮弓を用ゆる事殊ある過職あり
定め置るなりといひ傳へきり是其弓勢死活
に撥りゆ事處を考へて貞宗自身も村刮をせり

まゝは是等を射手村といふなり又古代射手は
を村刮尔強を所を操ある如く尔なりと削
り多れ村なり是も試探村といふなり
戰場尔持つ弓を弣り上を少く短く志す平尔
削り形り最吾矢束相應より少く短く吾中指
一寸短く反り低きに利あり上を短く志す平尔削
りを弓に返らぬ多しなり反の低は張るなり
ゆ那も弓を短くと致し著具志すは常尔同曲を
はるなり又吾心も少く強さを思ふはとにをべり

張み高低

戦場もさへも氣烈くぬる故なり弓は張も高く志
く用ゆ家ありふも弓底を引矢働さゆる故
なり常尔張低をを用ゆると打込烈さゆ其烈
さに應ぢぬ事を知きを總體活く撥む事を得る
ゆゑ常尔張低を試用ゆはるり畢竟常く撥む事
を調一置けを張高と弓に至るり利ゆ家ぬり張
高ふ弓ハ弦打輕撥ぬれく強く牙一太矢尔應一
て矢働さゆれ故尔用也ぬあり 太矢とは征
矢をいふ也 弣革
と重弦もゆて巻くべし又布をも用ゆるなり是

太矢といふ事
握革は事

早書義二二六

馬上少く弓張るやうの古義

手濡りゆりくゆれ故なり日置彈正常少を握る
所を革も巻ふ多れども戦場尔持以弓ハ細繩
も巻ぬるゆいへり又馬上も弓張るふ
と馬を止まると本彌を地尔はゆて附乃少一上を
左に燈と泥障ゆの間に踏一殊を左に手あ
引とめて弦をか多べし又馬を止め多殊地ゆ
つけて本彌の外竹を右の肩にあて左に手して
大中此邊を引とせて右若手ふる弦輪をかふる
ぬり殊革を冠らせ置けをかやうに時彌損せ

殊革は事

べしてよれをみたり

四季艸に引^ハ此名所の條尔云武用辨畧等に記せ
る名所を弓工此用ゆ家名所にしして射手方子は
入用尔あな名所なりと書きしハ心得る事
其所を^ハししていふとれ^ハ名をいふ^ハ何
を以て呼ぶや名所を用ゆべし但し附上八寸
む^ハつり此所を弓懸附^{ユカケツケ}といへ孰名所を古^ハ詞か
ア宇治拾遺に弓場始の條に件此弓^{トモユカケツケ}尔^ハ懸附
と見えつり古代^ハア^{ユカケ}指懸を結附し事^ハつるに

日本古義二二五

つりて弓懸附とはいひ習ふる多^ハあり又同書
四季艸 尔木中といふ詞を射手方^ハ用ゆ孰名所^ハ於
ア^ハ書きし^ハあ^ハを誤り側木といふ名ハ^ハあ^ハ
ども弓尔木中といふ名所を^ハ於^ハ側黒の弓^ハあ^ハ
とはい^ハども木中黒^ハ弓^ハあ^ハといふ^ハ高忠聞書
尔い^ハハ^ハ鏑を大事の矢ある故に側木此真中
は^ハ引詰^ハ射よといふ詞^ハ尔^ハ木中とい
ふ^ハ名所^ハは^ハ次^ハ鏑^ハ矢^ハを吾^ハ矢束^ハ一^ハ排^ハ尔^ハ引^ハ詰
^ハ限^ハて^ハ中^ハ古^ハつり^ハ矢束^ハ卷^ハを^ハか^ハなり^ハ但^ハし^ハ吾^ハ矢
束^ハ一^ハ排^ハよ^ハ引^ハ詰^ハ先^ハ射^ハる^ハ事^ハを^ハ鏑^ハ矢^ハぬ^ハか^ハつり^ハ多^ハる^ハ尔

三品藤弓
製作の事

とあはれ引詰て射る事は勿論の事なり
鹿苑院殿に代り乃製尔三品藤の弓とつふあ
て其製ハ三所の藤を巻く上下切詰矢摺あり其間ハ藤を
三所びくちぎて附り上り五所り又七所附し
下り三所り又五所ふち巻く其間ハ尔洲濱
鞆画を刮附れり紋の數を好み任とべし内竹
より側木へうけ模様をねやうにはくはり弓
と竹皮を木賊くそくよく磨き其上に掠の葉尔
て磨く形り紋と紙ふち形を切て澀糊しやくを張置

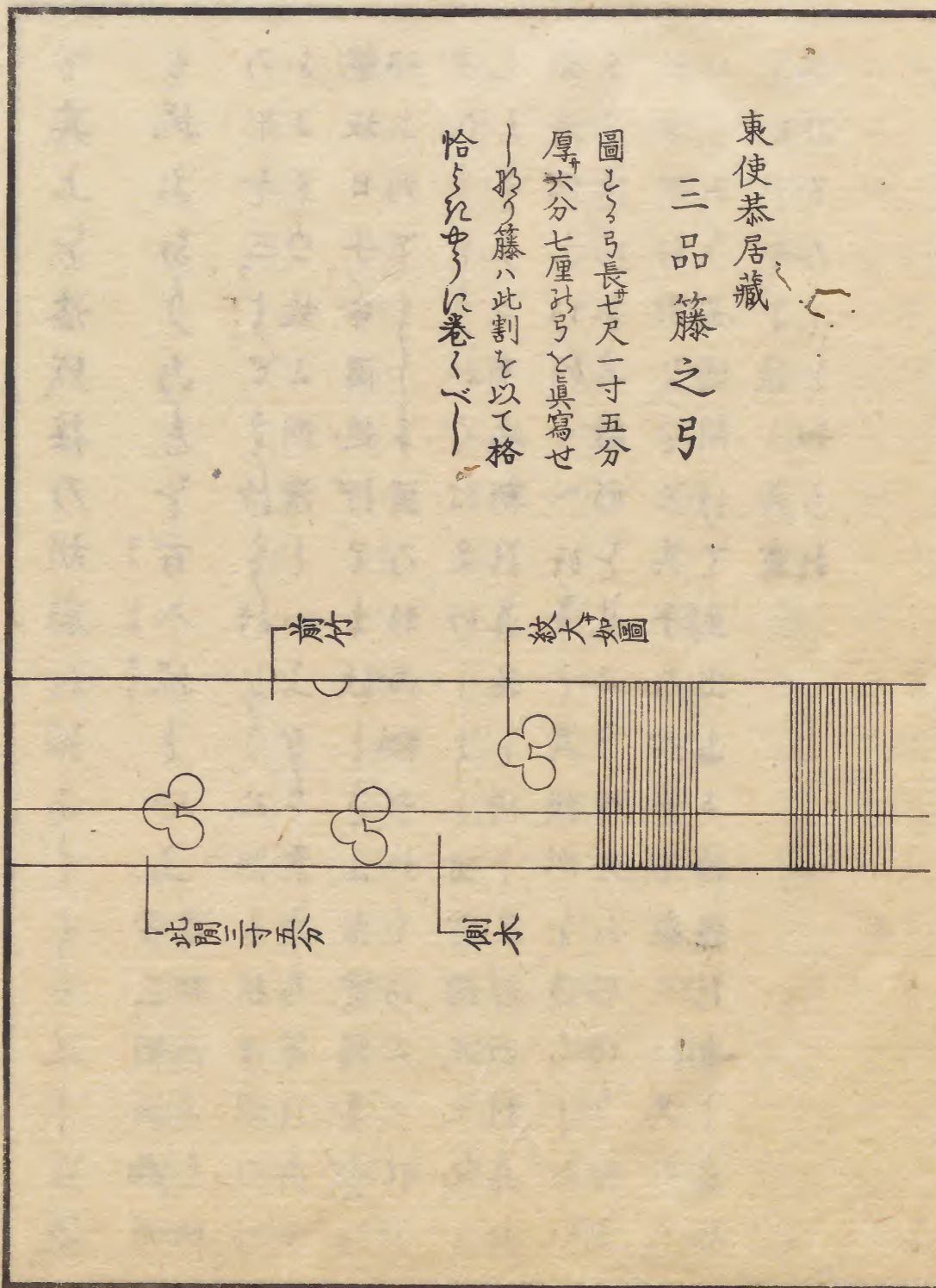
鞆画の古義

て其上を漆或荏乃胡麻油あくく延し百返
も拭ふありあを百入拭といふモ、シホ、ヌギ三ツ鞆画三ツ洲
乃形を三ツせきゆ三ツ此鞆を秋津洲の形
おるその故ハ洲濱といふなり素盞烏尊御子
磐坂日子命國巡行す次とさぬ出雲國惠曇
郷不到り多國乃形画鞆の如くあるれと
宣ひくはくは名けし出雲國風土記に
見えきり正朝此鞆に真物を得る皇都西村嘉兵
衛清住尔り其離形を見り蜻蛉形造らむい
も逢ば其離形を見り蜻蛉形造らむい
秋津洲形なり又其手乃心革を觀る其形人
れ容あり是國開けて生出る神體表し自然
器なるを誠し其靈

東使恭居藏

三品藤之弓

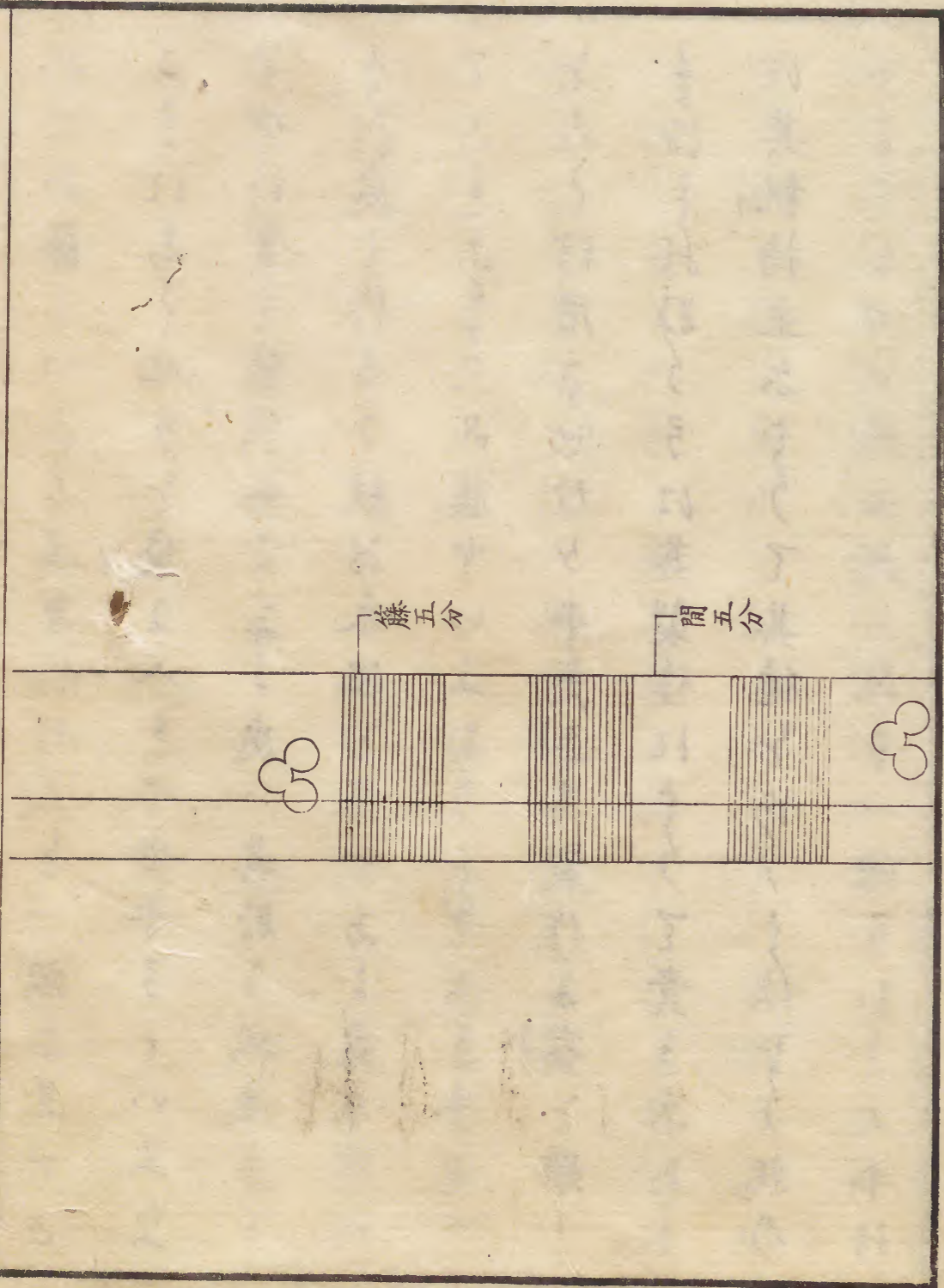
圖と弓長七尺一寸五分
厚六分七厘此弓と真寫せ
し形を藤ハ此割を以て格
恰とれやうの巻くべし



日本古義二三十一

藤五分

間五分



世平弓といふ事

此三品藤といふを真草行の三ツを一張見せし
る弓にあり此弓を袋に入きて世平弓といふ
て塗り多て藤紙巻ある處ハ真弓拭漆あり
を此處に行なり紋紙木地を見せある處を草紙
とありある三品藤といふありとぞある畢竟心
をまゝ信用させむが先其製作の容カタチを顯し
を此處にあり其製作にありて貴とありあり
ば其執持主ありて其徳をありとあり執の
弓ありても心を用ひれと一張弓あり太平

日本古義二三五

御代ありて弓を袋に納む是世平弓といふあり
古源義家朝臣奥州を討治めたり御歸洛の時
御弓を袋に入きて御馬前より持とれあり是即世
平弓なり其圖の後三年に繪る見えたり

